

2014年4月1日

調査委員会報告の概要を受けてのコメント

このたびは、STAP現象に関するNature誌の2つの論文につき、論文構成上の複数の過誤・不備が判明し、多方面への混乱を招きましたことを共著者に加わるものとして心よりお詫び申し上げます。今回の論文が記述した刺激惹起性多能性獲得(STAP)は、これまでの常識を越えた細胞制御の現象の報告であり、生物学的に特別な意味を持つ新原理の提案を含んでいます。こうした大きな結論を導く論文に、図らずも複数の過誤が論文に発見されたことは、深く遺憾に思っております。

調査報告書では、こうしたデータの過誤や不適切な取扱いは科学論文にあるべからざるものとして厳しいご指摘を受けましたが、6つの項目のうち、4つの項目では故意に間違った結論を誘導するため研究不正とは言えないとの調査の結論を受けました。一方、Article論文に関する2つの項目では、Figure 1のPCRのゲル写真の合成のあり方が不適切で改ざんに当たること、Figure 2の免疫染色の画像の取り違いが捏造の範疇に当たること、という大変厳しい評価を受けました。これらの判断を受けました状況は非常に残念であり、心痛の極みであります。共著者の1人として心よりお詫び申し上げます。

私は、これらの論文においては、既に作成された図表データを元に、文章を書き上げる面で他の共著者に教授・助言をする役割を主に担っており、今回問題となりました図表データの過誤は論文発表前に全く認識せずにおりました。このことには忸怩たる思いでございますが、これらは自らの研究室以外で既に実験され、まとめられていた図表データであり、他の実験結果との整合性が高いものであったため、画像の取り違えやデータの処理上の不適切な過程について気付き、それを事前に正すことには限界がありました。そのため、報告書では、私個人の関与については研究不正を認められないとのご判断を受けました。しかし、報告書にあるように、いかなる場合も実験の詳細に遡った検討の努力を行うべきであり、この点が不足していたとのご指摘は深く反省すべきものとして真摯に受け止めております。また、私を含めた研究経験の長い複数の研究者が共著者にながら、若手研究者の過誤の予防のための指導を徹底出来なかった点も大変悔やまれます。

なお、Figure 2の免疫染色の画像の件では、以前に、画像の不正流用の組織的な隠匿などの疑義を問う一部の報道がありました。そう言った事実は一切ないことをここに述べさせていただきます。Figure 2の免疫染色の画像の取り違いの調査委員会への報告の際、私どもの当初の説明に不十分なものがあつたことのご指摘も報告書にございましたが、これは自己点検での発見された過誤を追加報告する際の私どもの不手際によるものであり、隠蔽とは次元の異なるものであります。

これまで、STAP 研究関連では、多くのご質問を私にいただきながら調査委員会の開催中であつたなどのため、残念ながら大半についてお答えが出来ませんでした。これらの観点から、主だつたものに関しては、今後、まとめた形での回答と解説を私のほうから用意することを鋭意検討しておりますので、何卒ご理解いただけますれば幸甚でございます。

刺激惹起性多能性獲得という現象の真偽は、今後の生物学研究に大きな影響をもつものであり、今後、その検証は厳密かつ公正に行うことが必須であると思います。また、理研には、そうした集中的な検証に貢献する責務があると思っております。仮に、今回疑義を生じたデータを除いてみたとしても、その他のデータで刺激惹起性多能性獲得を前提としない説明が容易にできないものがあると私は考えており、理研内外での予断のない再現検証に対して積極的に協力して、真偽の解明に貢献したいと思っております。

理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター
笹井 芳樹